

## 奥保鞏元帥の聴覚障害について

松延秀一

小倉藩士出身の陸軍大将・奥保鞏(おく・やすかた、1845-1930)元帥は聴覚障害者であった。本稿では、その聴覚障害について、司馬遼太郎の『坂の上の雲』の描写の虚構性を指摘し、あわせて、日露戦後に失聴したことを示す。

### はじめに

およそ歴史小説というものは、史実と虚構がないまぜになっていて、読者もそれを承知で読んでいるはずである。しかしながら、作家の筆力のゆえに虚構が史実とみなされて流布されると、とんでもない誤解を招くことになる。

本稿で取り上げるのもその類であろう。文芸評論でもない実証論文で小説の虚構をあげつらうのは無意味とも思えるが、しかしこの指摘をとおして、奥元帥の聴覚障害についての事実を確定させることができれば幸いである。

### 『坂の上の雲』の問題部分

まず、問題のところを引用しよう。文春文庫の新装版(1999)の第四の118ページにある。

かれは、幕僚会議の中央にすわっていても、ほとんど無言でいた。もっとも口出ししようにもできない事情があった。かれは耳がきこえなかった。

完全な聾者ではなかったが、かれに話かけようとすれば、筆談でなければならぬ。参謀長以下の幕僚たちは、みなそうした。云々。

この描写の時期は、奥が日露戦争の第二軍司令官として「満州」に滞在していたときとされる。なお、乃木希典は第三軍司令官であった。

さてこの引用部分は何らかの典拠があったのか、あるいは司馬の想像の産物なのかかわからないが、戦場の常識からすればありえない描写ではなかろうか。軍の最高司令部は比較的安全な、と判断される場所に配置されるが戦況次第で移動し、司令官の一瞬の判断の正否が兵士の生死を分ける場であり、そういう場で筆談など可能か、という疑問が生じよう。さらに言えば、身体障害を持てば、徴兵事務条例(明治二十二年勅令第十三号)第六十七条には兵役免除の規定もあることゆえ、もはや現役の職業軍人ではいられないはずである。日露戦争期にこの描写を挿入した司馬の意図が何だったかは知るすべもない。

この小説は当初、産経新聞夕刊に1968年4月から1972年8月まで連載された。当該部分が発表された後、何らかの反響があったのかどうかはこちらではわからない。ただ書籍化される

ときに加筆も削除もなされなかったところを見ると、何もなかったのであろうか。

実際はどうだったのか。同時代人による証言の一つの例として、石光真清(1868-1942)の自伝的手記『望郷の歌』を紹介しよう。石光は陸軍大尉で第二軍副官として従軍、奥司令官と密着する立場であった。この手記は石光の生前未発表だったという。原本は1958年に出版されているが、ここでは中公文庫版(1979)による。最初の引用は、開戦直後、第二軍の遼東半島上陸直前の時期である。

東郷平八郎連合艦隊司令長官が、無表情な顔で幕僚二名を従えて乗船し、奥第二軍司令官と長時間にわたって密議した。(p. 13)(注)

これが筆談で可能だろうか。その次の引用は戦場での行動の一例である。

司令官がわれわれを振り向きもせず、砲弾の炸裂する空を仰ぎもせず、一人でゆっくりと馬を進めていた。まるで、つんぽか、盲目のようであった。(p. 25)

「つんぽ」という語が使われているが当時のことなのでさておくとして、これは比喩表現であって、実際は、聞こえていたこと言うまでもない。以下の司令部で戦況報告聴取を行う引用部分でもそれはわかるであろう。

奥司令官はこの報告の途中から両眼を

閉じ、膝の上に両手を組み合せて静かに聞き入った。(p. 40)

この部分を見ても、奥が聴覚障害を持っていたことはうかがうことができない。これはわかりやすい例であるが、こうした同時代人の証言からは、奥が、日露戦争時に聴覚障害を持っていたとはいえないということになるのである。

たしかに奥は聴覚障害を持っていた。それについては、新聞の訃報が情報を伝えてくれる。奥は1930年7月19日に85歳で死んだが、例えば、大阪朝日新聞は聴覚障害についてこう書いた(1930. 7. 20 夕)。

ただ耳だけが遠く、大声で[、]談話のできぬ人だった。([]は松延。以下引用において同じ)

ここでは、いつ耳が遠くなったかの時期は明記されていない。しかしそれは司馬の描写のように日露戦前からなのではない。実際に聞こえなくなるのは晩年に近い時期である。それについては彼の伝記を見るのがよい。

### 『奥元帥伝』について

奥は死ぬとき、伝記類の編纂を禁じたと伝えられるが、にもかかわらず、1933年、つまり彼の死後三年にして黒田甲子郎の手になる『奥元帥伝』が国民社から出版された。これには多くの陸軍関係者が監修したり回想を寄稿したりして協力した。この伝記は残念ながら所蔵している図書館がきわめて少ない。国立国会図書館東京本館のほか

は、福岡県立図書館、北九州市立中央図書館、九州大学図書館くらいである。奥が福岡県出身ということで、県下の図書館に寄贈されたものが戦災に遭わずに残ったということであろう。

この伝記は、日露戦争時までの時期は詳しく書き込んでいるが、日露戦後、彼が参謀総長に就任してからの時期についてはそれ以前と比べて簡略に過ぎる。もっとも当時にあつては、参謀本部が何を企画立案したかというようなことは機密に属していただろう。その点は物足りないが、本稿は奥の聴覚障害という私的事項に焦点があるため、差し支えが生じるわけではない。

その伝記の最初の部分は、「軍人としての奥元帥」として、その生涯について略述している。その 13 ページにこうある。

元帥総長となるの後耳患に罹り枢機に任じ難しとして数次辞職を申し出られたるも許されず、明治四十五年一月に到り始めて重責を解かれ議定官に親補せられた。

つまり、この記述では、耳の病気にかかったのは、参謀総長就任以後だったというのである。彼が参謀総長に就任したのは、日露戦後の 1906(明治 39)年 7 月、児玉源太郎総長急死の後であった。このとき 61 歳。そして明治 45 年すなわち 1912 年 1 月に辞任しているので、彼の耳はこの期間中に異常をきたしたことになる。仮に司馬の描くように日露戦争以前から聞こえない状態だったとすれば、そもそも参謀総長と

いう、会議や打ち合わせの多い激職に就任すること自体がありえなかったのではなからうか。むしろ、激職であったがゆえに、ストレスの蓄積とあいまって耳の病気にかかり、高齢ということもあつて聴力低下をきたした、とするのがわかりやすい。

ではいつ耳の病気が発症したのか。伝記の 286 ページにこうある。

明治四十一年二月には勢州石薬師を中心とする参謀旅行演習が行はれた。奥総長は彦根、八幡方面に出張して素人家に泊られたが、急に中耳炎が突発したので地方医師を招きて診察を受けられた。

明治 41 年すなわち 1908 年 2 月に中耳炎を発症した、という。そこで、

医師は静養を勧め又一行の黒沢参謀高嶋副官等も名古屋に到りて医療を受けられる様諫言したが拒絶せられた。

医師等の勧めを拒絶したというのである。なぜかといえば、予想できるであろうが、こうである。

私事の為に公務を曠廢し難しと[、]肯ずるの色すら無かつた。

つまり滅私奉公を絵に描いたような軍人だったわけである。このため陸軍の最長老山県有朋元帥から親展電報を打ってもらって帰京せしめたとのことである。中耳炎と診断されたにもかかわらず、職務を優先して加療を怠ったこ

とが、聴力低下の原因となったことは間違いない。

この後も病は進行する。

奥大将は耳患漸く重く為めに軍職を曠廢せんことを恐れて屢々骸骨を乞はれた。しかし至尊常に慰藉して其の職に留め給ふたが、明治四十五年一月二十日遂に辭職を聴許・・・ (p. 293)

明治 45(1912)年 1 月になってやっと參謀總長をやめることができた。在職期間 6 年の後半は中耳炎を伴っての勤務だったのである。

その後のことは、このように記述されている。

奥元帥の耳患に就ては既に略述せし所なるが、大正五年頃には余程聴力も衰えて来て高声で談話せざれば聴取れない程度となった。(p. 301)

せっかく參謀總長をやめたものの聴力は回復せずに悪化して、大声でないと会話できなくなった、ということである。大正五年、とは 1916 年である。このとき 71 歳。中耳炎の後、高度の老人性難聴へ進行した、ということであろう。そして大正天皇の死(1926. 12)後、聴力も大いに減退し心身も亦俄に衰へられた。(p. 322)

となり(81 歳)、1930 年の死に至る。

こういう経過で、奥は日露戦争以前ではなく參謀總長期以後聴力を低下させた。繰り返すと、中耳炎で伝音性難

聴となり、ついで老人性難聴へ進行した、ということになるだろう。

なお、伝記の巻末は關係軍人の回想集となっていて、そこでも「元帥の耳患は明治四十四年以後で日を経るに従ひ聴力は段々と衰へた」(p. 365)、「元帥は晩年耳患重くして人と相談するに大概是筆談で用を弁ぜられ」(p. 369)といった証言があり、奥の聴力低下が參謀總長期以降であることを示している。

### むすびにかえて

本稿を草しながら思ったことであるが、司馬は大変な取材力を持った作家である(東大阪市の記念館には龐大な蔵書が保存展示されている)から、ここに引用した史料には目を通したはずである。にもかかわらず、奥の聴覚障害を日露戦争期に書き込んだのはなぜなのか。しかしながら、こうした作家の意図をあれこれ詮索することは本稿の範囲をこえるので、ここで筆をおくこととする。

(注)この東郷・奥会談は石光の書では日付は特定されていないが、前後の記述からすると、1904 年 5 月 2 日ごろであろう。しかしこれは石光の記憶違いのようで、參謀本部の戦史では、航行の途次ということであり、4 月 23-25 日の間に商議したようである(『明治三十七八年日露戦史』東京偕行社、1912。第一巻、p. 360)。また、谷寿夫の『機密日露戦史』(原書房、1966)の記述では、4 月 24 日となる(p. 159)。